

第10回「論文の書き方(拓殖大学 岡崎章 教授より引用)」

・論文とは

「問・答」＝「目的・結論」の形式になっていること。
感想文やエッセイのような自由な形式は論文ではない。

・序論、本論、結論、の形式で構成されなければならない。

序論:あるテーマで問題を立てる。

本論:それについて論理的・実証的に論述を展開する。

結論:立てた問題に解答を与える。

下記の文章構成は×

起・承・転・結(比喩的効果を高める方法)

序・破・急(能の舞や日本舞踊の舞のペース)

導入・展開・結末(問題提起と結論がない)

・理論と実証のみによって記されなければならない。

文学的表現、美文は不要。

論理的・実証的説得力が不可欠。

・論文を書くときの注意点

・自分の意見を立証するために実験を行う

根拠ある主張を行う。

自分の意見の提案でも自己主張でもない。根拠が必要。

・用語を定義する

論を展開するとき、用語に複数の意味を持たせてはいけない。

・過去形で書く

・文言の注意点

×「です、ます調」→ ○「である調」

・逃げの言い方、どちらともとられる言い方はしない。

×「～とも言える」

×「～とも考えられる」

・口語体は使わない。

×「だから」、「だって」→ ○「よって」、「従って」、「つまり」

×「でも」→ ○「しかし」

・最も大切な点

最もよく陥るケースとして、目的と結論の整合性が取れていないことが問題となる。

目的をコピーして結論部分へペーストして、結論を記すことを勧める。

第10回「論文の書き方(柿山おすすめの基本構成)」

「目次」自動的に書いてくれるソフトがあります。

「概要」とは、論文が書き終わってから、全体の概要を、学部の卒業論文ではA4 2ページ程度で記載するものです。但し、論文執筆の前に、この概要文(A4 2ページ)で、論文の骨子を確定するのが理想です。

①「背景」とは、このテーマにたどり着いた自分の思いを記載するとともに、その思いが自分だけでなく、他の人も同じ考えを持っている事実を、参考文献で示す。(論文のフレッシュさの主張になります。)
また、このテーマを論文にすることにより、こういった社会的意義があるのかを示す。

②「仮説」とは、自分が思いついてしまった、提案したい原理原則です。この仮説そのものに新規性があることが必須です。また、この仮説は今後のデザイン界(自分の将来)において有用となる原理原則であることが重要です。(仮説が無い場合もあります。また、結論とイコールになる場合と覆る場合があります。)

③「目的」は短く、簡潔に記載します。ただらだと記載された目的は、何をしたいのかがわかりません。また、この目的の答えが結論になるので、「○○を明らかにすることが、本研究の目的である。」との記載が理想です。

「目次」

「概要」

序論	①「背景」	【客観と主観】、から導きだされる	④「方法」とは、この後で詳細に示す「実験」の概要です。全体的な実験システムの説明や、実験データをこういった流れで加工し、解析するのといったフローを記載するものです。
本論	②「仮説」	【主観】が存在するはず。その仮説を検証することが	
結論	③「目的」	となる。「目的」を達成する為に、最も効果的な実験・検証【客観】の	
付録	④「方法」	がしめされ、実施した	
	⑤「実験」	が、読み手が再現できるレベルで記載される。実験から得られた	⑤「実験」(または「調査」とは、実証できる客観的なものです。記載に関しては、読み手がまったく同じ実験環境を再現できて、同じ結果が得られることが求められます。
	⑥「結果」	【客観】が導きだされ、この「結果」に対し、筆者自身の解釈といえる	⑥「結果」とは、「実験」(または「調査」)により得られたデータ類です。ここは、そのデータのための記載にとどめ個人的な感想や評価は記載しません。
	⑦「考察」	【主観】があり、冒頭の「目的」に対応する	⑦「考察」とは、実験によって得られた客観的なデータ等に対して、主観的な評価や感想を記載するものです。この考察によって、仮説を裏付ける結論に導く記載を行いません。
	⑧「結論」	【客観に裏付けされた主観(主張)】が示されます。最後に	⑧「結論」とは、「目的」に対する解答です。ここでは、あらためて「目的」を記載したうえで、結論を簡潔にしめます。
	⑨「展望」	というカタチで、研究の感想、反省や今後の課題を示し、	⑨「展望」とは、この論文で明確にできなかった部分や問題点を記載するとともに、この論文の結論の先にある課題を記載するものです。ものです。
	⑩「謝辞」	で、論文の質の保証をする人たちにお礼を書いて終わり。	⑩「謝辞」とは、この論文を執筆する上でサポートしてくれた人に対するお礼であるとともに、こういった著名な人がサポートしてくれたんだ、という、質の証明になります。
	⑪「参考文献」	を最後につける。	⑪「参考文献」の記載に関しては、この記載によって、その書籍や論文にまでたどり着けることが必須条件です。

論文>制作「卒業論文」 - 何かのテーマを立て知見を得る

「背景」 近年家族間コミュニケーションが不足している

「仮説」 生涯を記録する脳波検知による自動撮影システムが家族間コミュニケーションの促進に繋がるのではないかと

「目的」 20年後に実現されることを想定した自動撮影システムを提案し、2014年現在の程度受け入れられるかを明らかにする

「方法」 20年後を想定した自動撮影システムを提案しアンケート調査を実施

「実験」 回答者に5分間の「20年後のある家族が自動撮影システムを利用している生活映像」を見せてアンケート調査を実施

「結果」 自動撮影に関して32%の人が抵抗感がある／家族内で会話が増えると52%の人が答えた／●●、●●のコメントがあったetc..

「考察」 提案した自動撮影システムは、2014年現在において普及させるには、●●、●●の改善を行うことが必要と考えられる

「結論」 若者では、●%の人が受け入れられる、高齢者では●%の人が受け入れられることが明らかになった

論文<制作「制作報告書」 - 提案する制作物の正当性を主張する

「背景」 近年家族間コミュニケーションが不足している

「仮説」 場面に応じて間を間仕切る、家族の成長に柔軟に対応できる間仕切りが家族間コミュニケーションの促進に繋がるのではないかと

「目的」 家族間コミュニケーションの促進に繋がるプロダクトの提案をおこなう

「方法」 既存製品の調査分析／ニーズ調査分析を通して提案する間仕切りの位置づけ【コンセプト】を明確にする
間仕切りを構成する各要素の「間仕切る効果」を検証し仕様を確定する

「調査」 既存製品の市場調査・分類、聞き取り調査、文献調査から「可変性」「交流促進性」をコンセプトとする

「検証」 太さの違う棒を5種、5種の棒を自由な間隔で立てられる土台を準備し、設定した4シチュエーションに対する適切な間仕切りを作れる
実験ツールを制作して、被験者に制作を依頼し、その傾向を分析する

「結果」 4シチュエーション毎に、おおまかな傾向(Aシチュエーションでは、●mm●mmが平均値etc.)を見いだした
提案する間仕切りの棒の太さ●mmと間隔●mmの裏付けを得た／etc..

「結論」 ●●、●●を仕様とし、●●な構造を持たせた家族間コミュニケーションの促進に繋がる間仕切りを提案した